

函館元町カトリック教会の文化的価値に関する研究

建設工学専攻
建築史研究

ME16028 おはらけいたろう 小原慧汰郎
指導教員 伊藤洋子

1. 研究背景・目的

北海道函館市に現存する元町カトリック教会は、北海道におけるカトリックの布教において、最も古い歴史を有している。しかし、現在この教会堂は、重要伝統的建造物群保存地区の伝統的建造物という扱いでしかない。そこで、本研究では保護の手厚い国指定重要文化財への指定を最終的に目指し、元町カトリック教会の文化的価値を考察することを目的とする。

2. 元町カトリック教会について

2.1 元町カトリック教会の沿革

元町カトリック教会は、1859(安政6)年来日したフランス宣教会のメルメ・カション師が寄寓した称名寺という、現在の弥生町にあった寺院内に建てた住居に礼拝室を設けたものが始まりであると考えられている。その後1867(慶應3)年、現在の元町に正式な木造の教会堂が建設された。しかし、1907(明治40)年の函館大火により、木造の教会堂は焼失する。その後、1910(明治43)年に煉瓦造のネオ・ゴシック様式で再建されるが、再びの大火に見舞われてしまう。その大火の際、煉瓦造りの外壁を残して焼失したため、木田保造は、1924(大正13)年に煉瓦の外壁をそのまま利用し再建した。これが現在の元町カトリック教会である。

2.2 現在の元町カトリック教会の概要

竣工：1924（大正13）年

設計者：不明

施工者：木田保造

構造：煉瓦造モルタル(聖堂)

鉄筋コンクリート造(鐘楼)

元町教会は、三廊式の教会堂であり、天井はヴォールト天井である。聖堂の正面右側に木田保造による再建時の鐘楼を配置している。当時の聖堂の玄関部を撤去し、鐘楼が玄関部としての役割を担っている。翼廊をもつ十字型の平面形式であるが、1972年の物置部屋増築により、周囲からその形は確認できない。また、この頃、信

者の生活などのためのマリア館が増築されたと考えられる。天井は1977年頃に水色に塗られたものであり、当初は白色であった。



写真1 元町教会



写真2 元町教会 明治43年頃



写真3 元町教会 内観

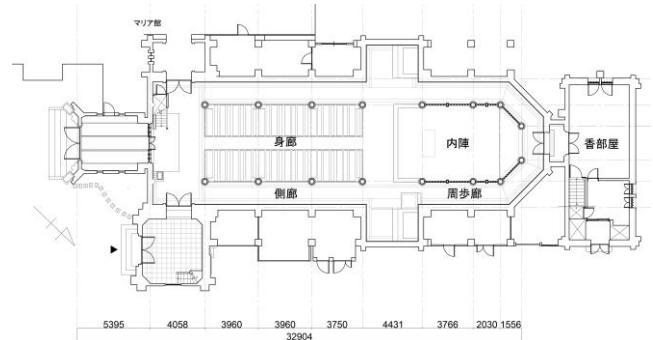


図1 元町教会 平面図 現在

3. 元町教会の評価方法

昭和中期頃までに建てられた現存する日本全国のカトリック教会建築(近代化建築を除く)をまとめ、その中で元町カトリック教会の評価・位置づけを行う。評価項目として、それぞれ平面形式、天井の形態、意匠的観点から柱や外壁などに表れるデザイン、また、教会堂の外部立面形態、内部立面の構成などを挙げ、元町教会との比較・考察を行う。以下にリストの簡略化した表を記す。

司教区	教会	三廊式	リブヴォールト天井	ピア	翼廊	内部立面構成						
						Type0	Type1	Type2	Type3	Type4	Type5	Type6
札幌教区	4	2	1	0	1	1	0	0		0	0	0
仙台教区	4	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
新潟教区	6	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1
さいたま教区	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東京大司教区	14	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
横浜司教区	9	5	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0
大阪大司教区	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
名古屋教区	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京都司教区	7	3	2	1	0	0	0	0	1	0	0	1
広島教区	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡司教区	14	1	4	2	5	0	0	1	0	2	0	1
大分司教区	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鹿児島司教区	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長崎大司教区	51	41	29	13	20	0	2	2	4	2	11	8
那覇司教区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 1 教区別教会数及び評価項目簡略表

3.1 内部立面の構成による分類について

リブヴォールト天井を持つ教会堂は、内部立面構成を以下の 6 つに分類することができる。Type0～3 は第二柱頭を持たず、4～6 は第二柱頭で壁付けアーチを支持している構成となっている。

Type0 第一柱頭から横断アーチ、交叉アーチが伸び、構成されている。

Type1 内部列柱の頂部が露出した貫により連結され、連結部からヴォールトが組まれている。

Type2 内部列柱の間に 2 連のアーチを有している。

Type3 第 1 柱頭を起点に 2 つのアーチが組まれ、リブヴォールト天井を形成。

Type4 Type3 の天井構成を上昇させ、第二柱で支持した形態。

Type5 アーチによって挟まれる壁面に水平の帯を有するもの。

Type6 教会の完成形であり、トリフォリウム、クリアストリーを有する。

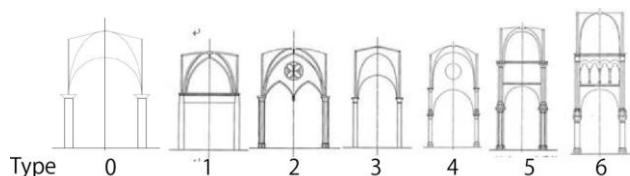


図 3

4. 考察

4.1 北海道における元町教会の評価・位置づけ

北海道には多くのカトリック教会があるが、昭和中期頃までに建てられ、北海道に現存するカトリック教会堂は北一条教会、富岡教会、住之江教会、元町教会の 4 つである。この中でも、元町教会は唯一のリブヴォールト天井を持つ教会堂であり、内部立面構成は Type0 に該当する北海道で最も完成された教会である。また、バ

ットレスを有し、鐘楼と香部屋にはロンバルディア、聖堂にはピナクルが施されている。このように、デザインの観点からも北海道では最も優れている教会堂である。また、唯一翼廊を持つ十字型平面形式の貴重な教会堂である。

元町教会は、燃え残った外壁をそのまま利用した特殊な再建経緯を持ち、全国的にも珍しい事例である。これは、函館の大火が多い地域である特徴が生んだ教会であり、その数少ない生き残りである。このことから歴史的にも価値あることが伺える。元町教会は教会堂として、また歴史的にも北海道を代表するカトリック教会であると考えられる。

4.2 全国における元町教会の評価・位置づけ

元町教会と同じ内部立面構成 Type0 であるのは、横浜司教区の清水教会(昭和 10 年竣工)と仙台教区の弘前教会(明治 43 年)である。この立面構成は、長崎の教会にある第二アーチが不足した形態である。しかし、全国的にリブヴォールト天井を持つ教会は少なく、全国的にも元町教会が立派な教会堂であることがわかる。また、翼廊を持つ十字型平面の教会についても、長崎の教会を除くとマックスヒンデル設計の新潟教会と元町教会のみであり、教会堂としての格式の高さがうかがえる。明治から大正にかけて翼廊を持つ教会堂が多く、年代的な特徴の表れ、教会に詳しいものの設計であると考えられる。また、元町教会のような煉瓦造りの教会堂も全国的に少なく、その大部分がリブヴォールト天井を有し、文化財の指定を受けている。

5. 総括

元町教会は、北海道において最も歴史があり、教会堂として文化的価値のあるものだと考えられる。また、施工者の木田保造は、北海道に鉄筋コンクリート建築を広めた重要人物であり、優れた施工者の作品であることがわかる。全国のカトリック教会の中でも、リブヴォールト天井を持つ歴史も古く、教会としてのデザインも施されている優れた教会堂と位置づけることができる。今後、保護の厚い文化財として残していくべきと考える。

参考文献

- (1) 御福翔 「函館元町カトリック教会の復原研究」 芝浦工業大学 2016 年度卒業論文
- (2) 三沢博昭(2000) 『大いなる遺産 長崎の教会』